

---

# カメラア

有終文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カメリア

### 【Nコード】

N9240R

### 【作者名】

有終文

### 【あらすじ】

コンプレックスが大きい橘更紗の高校生活。

## 1・高校デビュー

鏡の前に立つのはいやだった。特にお風呂上がりには、脱衣所に置いてある姿見の前に立つのは殊更いやだった。

ひよろひよろと長い、骨と皮だけのような手足も、ペンで書くようにくつきりと浮かび上がった肋骨も。

そんな娘を見るのが嫌だったのか、実の母親は、私ではなく再婚者の連れ子のお兄ちゃんを可愛がったんだろう。

私の家族構成は、ごくごく普通の一般家庭よりも少し、難しくなっている。

お母さんは、実のお父さんとの間に私を作った。

けれど、二人は、最近流行の『性格の不一致』、他にも理由があるだろうけれど大きな理由としてはそれによって離婚した。

私が本当に小さい頃の話だから、私はそのお父さんの顔を知らないけれど、私の顔はお母さんには似ていないから、お父さんに似たんだろうと思ってる。

そして、私が小3の時、お母さんは今のお父さんと再婚した。そのお父さんの連れ子はお兄ちゃん、…1つ年上だった。

お兄ちゃんのお母さんは、お兄ちゃんを生む前から体が弱くて、お兄ちゃんが小さい頃に亡くなってしまったみたい。

お父さんはあまり家にいなくて、お母さんはお兄ちゃんを可愛がっている。

それが、私の家の日常だった。

そう、この春先、急に転勤となったお父さんにお母さんがついていくというまでは。

「お母さん、なんて？」

家でまともに口をきいてくれるのは、お兄ちゃんだけだったから、私はお兄ちゃんに全ての話を聞いていた。

「一週間後には、福岡だったさ。俺はここにいるけど、さらは？別に母さん達についていっても、親戚んちに行っても良いんだぞ？」

「お兄ちゃんがここにいるなら、ここにいる」

「そうか」

お兄ちゃんは優しい声で、頭を撫でてくれる。お兄ちゃんの手は大きくて少しゴツゴツしてるけど優しくて大好きで、もっと撫でて貰いたくなって私は進んで頭を差し出す。知ってか知らずか、お兄ちゃんは頭を撫でるのをそのまま続けてくれる。

「お前、この春から一緒の高校だな。楽しみだ」

「うん」

お兄ちゃんが使っていた参考書を借りて必死に勉強していた甲斐もあって、私はお兄ちゃんと同じ高校に通えるようになった。

制服もサイズ合わせしたものが家にある。お兄ちゃんとお揃いの制服。すごく嬉しくて、お兄ちゃんに写真を撮って貰った。

「そつだ、これ、親父から貰ってたんだけど」

そう言っつて、差し出されたのは、白色の携帯電話。

「お前の、もう俺の番号は登録しといたから、高校で何かあったらすぐにかけるんだぞ」

「うん」

私の高校生活は、お兄ちゃんとの二人暮らしで始まった。

\*\*\*\*\*

ぼうつとしているとあっけなく入学式も終わってしまった。

私が進学したのは、県立の高校。選んだ理由は、お兄ちゃんがそこに通っていたから。

お母さんが家からいなくなって、お兄ちゃんは意気揚々と私の身支度などを手伝ってくれるようになった。

ぼさぼさに延ばしていた髪を、お兄ちゃん行きつけの美容院に連れて行かれて、切りそろえられ、パーマもかけられた。

なんで、つてきくと、高校デビューだ、の一点張りで、他にもメイク道具を買ってくれたり、服を買ってくれたり。

着せ替え人形のようにあれだこれだと着せるお兄ちゃんに驚きながら、そんなお金がどこから出てくるのかきくと、秘密だとの一点張り。

素材が悪い物をどれだけ着飾っても無駄だし、お金ももつたいないとは思ったのだけれど、お兄ちゃんが楽しそうだから、言うのは止めた。

お兄ちゃんがブローしてくれた髪は、春風が吹いてくるせいで、ぼさぼさになった。

急いで手櫛で直すと指に桜の花びらがつく。その風に乗ってきた桜の花びらが髪の毛についたようだ。

私なんかにつくなんて、可哀想な桜ね、と思いながらその花びらを風の中に返した。

式典のあった体育館から教室にはいると、座席表が張り出してあつ

た。席に着くと隣の席の女の子が声をかけてくる。

「私、実佳！片桐実佳っていうの。ねえ、名前、なんていうの？」

最初は私に話しかけてるんだとはとても思わず、誰か反応してあげたらいいのに、と思っていた。

「ねえ、ねってば！」

「私…？」

聞き返すと、ようやくか、という感じで彼女が反応した。

「そうそう、あんた」

「えっと、私は、橘更紗です」

「あ、もしかして、今日、在校生代表で挨拶してた、橘先輩の妹とか？」

「はい、兄です」

その返事に、片桐さんだけでなく、周りもざわついた。

「へー」

そついう返事が片桐さんから返ってきたくらいだろうか。

「えー！」

教室の入り口からお兄ちゃんの声がする。その声に反応して、周りがきゅあきゅあ反応する。

「…片桐さん、ちょっと、ごめんなさい」

お兄ちゃんの方に私が行くとお兄ちゃんは、苛められてはないかとか忘れ物はないかとか、色々しつこくきいてはきたけれど、私のほうから用事をきくと特にないようでも狼狽えた。

「片桐さんと、話をしていたんだけど」

というのと、とても嬉しそうな顔をして、友達が出来たのか、と聞いてくる。首を振ると寂しそうに肩を落とした。

「た、橘先輩……?」

後ろから声がすると思ったら、教室の前の廊下だったもので、教室中のみんなが見ていた。見られるようなことをしてはいないとは思うのだが、お兄ちゃんは如何せん、芸能人顔負けの甘い顔をしているため視線を集めやすいということを忘れていた。

「じゃあ、私は教室に戻るね」

「授業が終わったら、メールしろよ。放課後は一緒に帰ろうな」

その声を聞き取ったクラスメイトの何人かの口が「シスコン」の形に動いたように見えた。

\*\*\*\*\*

数日後、私は暮らすにも馴染み、隣の席の実佳と仲良くなった。今日は先輩方から部活の説明会があった。部活の加入は自由で、入っても入らなくても良い。

「更紗はなんの部活にはいる?」

「演劇部」

「あら、珍しく即答。何かあるの？」

「お兄ちゃんが、入るなら演劇部以外はゆるさん、だって」

「このー、シスコンとブラコンめがっつ！」

お兄ちゃんこと橘貴弘がシスコンという事実は、私が入学して数日後には公然の事実になってしまっていた。

私が隠そうともしないし、そもそも、毎朝教室まで送ってきて、実佳に私を託して、終業の度に部活を休んでまで私と一緒に帰路にっている。しかも、まあ二人でいるときは手を繋いでいることもあり、知らない人は普通にカップルと間違えているに違いないのだ。

「まあ、家庭の事情で」

「詳しいことは聞こうとは思わないけど、あんたら兄妹の仲は異様よ…私は兄貴となんて話さないもん」

「私たちは普通にしてるだけなんだけどなあ……だって、スキンシップって落ち着く」

「それは恋人とだけしてればいいの！……兄弟でするもんじゃないって」

呆れはしているけど、他の人はドン引きしている私たちの関係を実佳はなんと受容してくれてはいた。

実佳には大学生の恋人がいて、それがどういう人なのか、色々教えてくれる。人は惚気といって呆れていくのだけれど、幸せそうに話す実佳はとても可愛くて、ずっと見ていたい、と思うくらいだった。私が、実佳の十分の一でも可愛ければ良かったのに。そう思ってもこの顔も身体も生まれ持った物だから仕方がない。

「よしっ！今日は私と一緒に帰りましょ！駅前にパフェが美味しい



お店があるんだって」

「じゃあ、お兄ちゃんに連絡する」

「貴弘さんが駄目と行っても行くからね」

「分かった」

私はメールして、返事を待たずに実佳と一緒にそのパフェを食べに行った。

しばらくすると、どこぞの店に行ったと言うことは一言も言っていないのに、お兄ちゃんが店に来てビックリした。

会計はお兄ちゃんが全額払ってくれたので、実佳は文句は言わなかったけれど、お兄ちゃんの過保護っぷりに心底呆れていた。

## 1・高校デビュー（後書き）

初めましての方もそうでない方も宜しくお願いします。

高校時代を思い出して色々を書きますが、今はどうなってるんだろ  
う……。と思ってたり。

楽しんで頂ければ幸いです。

## 2・再開

「あ、朋にい」

「あれ、さら」

朝、下駄箱でお兄ちゃんと別れたときに、間違えてお兄ちゃんの袋も私が持っていたことに気付いた。

それを渡すために、まだ始業のチャイムも鳴らない頃の2年生の階を歩いていると、見慣れた顔があつたので声をかけた。

会わない間にぐんぐんと身長が伸びていて、多くの人がいても頭一つでているのですごく目立っていた。

兄はどちらかというところ一種暴れ馬のような荒々しい気質も孕んだ美形だけれども、朋にいには物腰が柔らかくて優しく品のある、王子様のような人だった。身長が伸びていても、髪型が変わっていても、彼の纏う雰囲気は変わっていない。

「朋にいが卒業してから会ってないから…1年ぶりだね」

「こちらこそ。っていつても、貴弘がさら、さら、って言ってたから、久しぶりな気もしないけどな」

「朋にいには会わない間に格好良くなっちゃってビックリした」

「さらは、ますます可愛く笑えるようになったな」

「そんなお世辞言っても何もでないよ」

「お世辞じゃないけどね」

話ながら少し引き寄せて、朋にいには私の頭を撫でた。朋にいも昔から私の頭をよく撫でる。

お兄ちゃんの少しゴツゴツした手と違って、朋にいの手は白い、しなやかな手で、お兄ちゃんとの時と撫でられる感覚が違っていたけれど、私はどちらに撫でられるのも大好きだった。

「今日は2年生の所に何の用だったの？」

「あ、お兄ちゃんに渡す物が…」

「渡しておいてあげるから、そろそろ教室に戻りな。上級生のたくさんいるところなんて、居辛いだろ？」

「朋にいい、ありがとう」

朋にいい、袋を渡して私は教室に急いだ。

この様子が、2年生の先輩方で光のごときスピードで噂されているとも知らずに。

\*\*\*\*\*

「更紗！朝から公衆の面前で、あの久賀先輩といちゃついてたって本当？」

「へ」

教室に入った瞬間に実佳に大きな声できかれて、目をまるくした。久賀って誰だっけと一瞬考えた自分はある意味酷い……朋にいいことだ。

「と…久賀先輩となら、少ししゃべったけど、それだけだよ？」

「並々ならぬ雰囲気だったそうだけど」

実佳が迫って興奮しながらきいてくる。というか、なんでもうしてるの？

「久賀先輩とは、小学校の頃から仲が面識があるから…」

「へー？」

「久賀先輩とお兄ちゃんが幼馴染みで、でも、去年くらいから全く

会わなかったから、久しぶりで少し話し込んでただけだって」  
「ふーん」

忘れていたけれど、朋には非常にモテる。まあ、兄もそこそこ持てるが、朋にいいほどではない。

それこそ、芸能人のようにもてるのだ。盗撮ブロマイドが出回るのはもちろん、追っかけや半ストーカーなんかもでたこともある。

小中の頃もファンクラブかなにかがあつて、偉そうな知らない先輩や同級生からよく呼び出されて、念を押されていた。もしくは、口利きするように頼まれたり、写真を撮るように脅されたりなんかもした。

……すっかりしていた。また、同じことをされるんだろうか。そんな暇人ばかりなんだろうか。

偏差値が高い＝勉強に忙しいからその他のことにはそこまで関心がないだろう、という私の予想は外れていた。

「もしかして、やばい？」

「そこそこに。有ること無いこと、既に学校中に広まってるよ」

ありえない、話していたのは、つい5分ほど。話した時間はいわずもがな、あまり長くない。

なのに、既に学校中に広がってるというこの学校の情報網に愕然とした。

「久賀先輩の人気、舐めちゃ駄目よー？ま、久賀先輩と知り合いだったなんて意外だけど、ご愁傷様としか言いようがないわ」

「とも「さらー！」

私が叫びたくなったときに、教室のドアが開き、後ろからお兄ちゃんが私に抱きついてきた。

驚いている実佳の顔が……怖いを通り越して面白い。

「朋に、着替え渡しといてくれたなら、俺の所に持ってきてくれればよかったのに」

「お兄ちゃん、とりあえず、抱きつくのはやめて」

「さらー！」

「いいから、抱きつくのはやめて話をして？」

さらに反抗期だとぶつぶつ呟いているけれど、ここは教室で、クラスメイトの真ん前だ。

あとでの対応を考えると、離れた方が良い。

……手遅れな感じがするけれども。

「そつだ、着替え、ありがとな。じゃあ、時間だから戻るな」

「うん」

お兄ちゃんが頭をぼんぼんと優しく叩いて、教室を去っていった。今日はまだ始まったばかりなのに、なんだか疲れそうな気がして、溜息をつくとき、実佳が同情の眼差しをくれた。

まだ、入学式から、指折り数えられるほど経っていないのに、波瀾万丈の予感がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9240r/>

---

カメラア

2011年5月4日12時37分発行